

真実を求め凡愚に

学生部長 上 里 一 郎

卒業（修了）おめでとう。諸君は本学で所定の単位を修得して、めでたく卒業（修了）されるわけですが、まずはおめでとうと申し上げる。

本学で過ごした青年期の数年間は皆さんにとってどのようなものであったのでしょうか。何を学び、修得し、何を考え、悩み、体験したのでしょうか、多くのものを得たうえで、の巣立ちだと思いますが……

御承知のように、本学は統合移転の最中であり、諸君の在学中に限っても、社会科学研究所設置、生物生産学部の移転、教育学部統合（福山分校廃止）移転などがめまぐるしく行われました。昭和40年代の大学紛争以来国立大学でこれほど改革を自主的に推進した大学は例をみないといっても過言ではないでしょう。この背後には、本学の研究・教育のレベルアップを図りたいという全学教職員の熱意とエネルギーがあります。前途にはさまざまな障壁がたちはだかっていますが、一歩一歩理想とする学園へと前進していることは間違いありません。10年後には、諸君が、“あれは私の卒業した大学です”と胸をはって語れる大学になっていることでしょう。諸君の支援をお願いしたい。

しかし、現在は移転と改組の過程にあるため、大学全体が常に多くの課題を抱え、絶えず変化を余儀なくされています。そのため、教育と研究にとっては極めて、貧弱な環境がつづいています。とりわけ移転の遅延によって10年以上も抜本的な対策がとられていないこともあり、移転待ちの学部の教育・研究条件の劣悪さは筆に尽くせない状態です。

課外活動にしても施設の貧弱さに加えて、

部員が西条と広島キャンパスに分断されたために、部活動が阻害されたり交通事故が発生したりしました。責任者の一人として、過渡期に学び去る諸君に心からお詫びしたい。

しかし、このような大学環境でありながらも、本学での4～6年の学生生活で多くの貴重な体験や思い出を、多くの師や先輩、友との出会いがあったことでしょう。

昭和30年代のはじめに本学で学んだOBが、次のように書いておられます。「寮の部屋は12～13畳でしたが、そこに6人くらいが住み、マグロが並んで寝ているようでした。ミカン箱が机で、勉強しようとしても無理でした。しかしあのころが一番懐かしいですね。まさに青春でした」。きびしい環境であればあるほど、人との出会いはより感動的になるのかもしれませんが。ここで培ったものを大切にしていきたいものです。

諸君はこれからきびしい社会の中でそれぞれ生きていくわけですが、志を持ち、人生へのパッションを持って真実を求めて歩いてほしいものです。

人間はともすれば表面に現われたものに幻惑されやすいものです。学歴や肩書などもその好例でしょう。しかし、これがそのままその人の人間としての価値を示すものでないことはいまでもありません。大切なのは表面に現われた現象の背後にあるものを見抜く見識を持つことでしょう。でなければ、瞬間瞬間に生きることになってしまい虚に生きることになりかねないでしょう。

いつも“Fact”はなにかと問いかけ、考えながら、凡愚に徹してほしいのです。

諸君の健闘を祈ります。